夕陽丘図書館での資料提供には、いくつかの形がありました。その中には、時代とともに役目を終えていった活動もあり、また新しい図書館に受け継がれていく活動もありますが、このたびの閉館にあたって、それぞれに深くかかわってきた人たちの思いはひとしおです。

対面朗読のあゆみ

公共図書館における障害者サービスのさきがけとなったのは、昭和45年ごろ、東京都立中央図書館での視覚障害者サービスと聞いています。

大阪では、昭和49年夕陽丘図書館の建設途中に視覚障害者団体からの要望もあり、対面朗読室が設置されサービスのスタートを切りました。

対面朗読が採られたのは、点字図書、テープ図書の作成はすでに他機関で実施されており、利用者の「いま、読みたい」というニーズにすぐ答えるということでの対面朗読の選択で、図書館における障害者サービスの理論的構築よりも、まずはやれるところからはじめるという館の姿勢が基本となっていました。開館時には、２名の職員で図書の朗読、９時～17時の利用時間ということでした。しかし実際には、社会人の利用が多く、時間帯も夜間を強く希望され、図書の内容も予想した文学書や一般書でなく、鍼灸関係など自然科学の専門が中心という状況になり、図書館側の対応も９時～21時、職員３名そして朗読者の登場と実態にあったものに変わっていきました。当時新しい分野のサービスということで、図書館内外の関心も深く、職員も都立中央図書館をお手本に新着図書目録の発行や、朗読講習会、見学・研修と自己学習におわれ、試行錯誤の毎日ながらも朗読力のある朗読者にささえられ、利用者との間をつなぐコーディネーターの役割に徹した日々でした。

環境整備がまだ不充分で駅からの点字ブロックや図書館の建物を音で知らせるコールサインも未設置状態のとき、バス停への見送り途中、はげしい夕立におそわれ、全身ボタボタのまま、女物傘の役立たなさをいっしょに涙が出るほど笑った全盲のＳさん。

明日からスキーとはしゃぐ職員に雪害の恐さを諭された、雪国出張中に中途失明されたＭさん。

朗読講習中、ホントに必要としているものは職業のための本（生活がかかっている）と、性について書かれた本（健常者と同様に生きるため）この２つといい切り、タンタンと指導して下さった全盲のＨ先生。

職員の肩こりや風邪をいち速くキャッチして、鍼や指圧のオマジナイをして下さった、ご自分も治療者である朗読者のＨさん。

20有余年朗読をつづけとおし、昨年は社会功労者として表彰された朗読者のＷさん。

と、ひとつひとつが仕事にささえられたあったかい思い出です。障害者の人権保障としての位置が明確にとらえられ、利用者の声が反映出来る現実と、ささえる朗読者の力量の深さが、今日の夕陽丘図書館の障害者サービスにつながったものと思っています。　（藤川　文子）

夕陽丘の対面朗読が終わって

昨年９月の最後の対面朗読から、はや５ヶ月経ちました。白杖を頼りに図書館へ来られていた人達は今どうしているでしょうか。他の図書館などへ足を運んでおられるかしらん。でも「夕陽丘でなければ…」と口にされた方が何人もいました。なぜか。ひと言でいえば“まさに図書館だった”から。豊かな資料群と有能な職員を擁する図書館だったから。

その図書館の活動の一部である対面朗読に目と

声で協力させていただいて、私は何と多くのものを貰ったことでしょう。例えば、①相手のニーズに応じて本を読むということは、自分ではとても手を出さない本をも読むことであり（つまみ食い程度だが）世界を広げてもらえた。②決められた日時に図書館へ行き、2時間ぶっつづけで相手にわかるように本を読むためには、心身のコンディションを整えて臨まねばならない。それがひいては健康につながる。③私が目の代わりをし二人三脚で本を読んだ目の不自由な方々、そして担当職員の方々との出会いがあって、私を必要としてくれたことに心があつくなる、などです。

さて、新図書館にのぞむこと。「素晴らしい対面朗読室ですよ」とおききして楽しみにしているのですが、最も大切なことはそこでどんなサービスがなされるかでしょう。新図書館は都心から離れたことで、図書館利用にハンディキャップを持つ人達に対して、ひとつマイナス条件を背負い込んでしまいました。それを補って余りあるサービス、つまり健常者と同じように、求められた資料はいつでも提供できる状況をつくり出してほしいものです。

ところで、私、年とともに記憶力、視力が衰えており、音声訳者としての適性を欠くのではないかと、目下“荒本”との関係を考えているところです。（武田　瑠美）

いま、自動車文庫のことをおもう

私が自動車文庫の係に配属されたのは昭和55年4月のことです。府内の多くの市町村で図書館がととのい、府立図書館の自動車文庫がその役割を終えたといわれ、撤退をはじめる少し前の時期でした。

同じ府立の、中之島という歴史ある図書館の、歴史ある資料の書庫出納などを担っていたセクションからの異動で、その雰囲気のちがいに少しおどろきました。夕陽丘図書館には中之島図書館にないセクションとして、児童室や視覚障害者への対面朗読、特許資料室、それにこの自動車文庫係などがあり、それはよく言えば多様性に富んだ、言いかえれば雑然とした図書館といった印象でした。

自動車文庫の担当は、出動が月に12回ほどあって、朝9時半頃出発、帰館は4時頃と、出ていることが多くあわただしい職場でした。配属されて初めて出動したのは河内長野市の駐車場で、出かける前に課長から「自動車文庫はそれだけで図書館、いまから図書館長だ」と、恫喝かたがたの激励を受けて出発したことをおぼえています。

言われてみればそのとおりで、車にのせる本の購入から、車への配架、そして駐車場での貸し出し、館にかえってからの統計や予約の本の処理など、おおむねひとりでこなさなければならず、忙しくもありましたが、楽しい毎日ではありました。

自動車文庫は、平成2年の3月に最後の一台が廃止となりその任を終えました。自動車文庫は終焉となりましたが、5台の車がまわっていたときに購入した図書や、それ以外に読書会用にと買い揃えた図書がいま、「読書会用図書」として、約8千タイトル2万3千冊ほどあり、それは市町村の図書館を通じて府内各地域の読書会に利用してもらっています。自動車文庫が府内を巡回したことで、少しでも地域の図書館の創設にお役にたったと信じたいとおもいますが、このようにして廃止となった自動車文庫が、いまそのなごりとして残されたものといったらこの図書群でしょう。

敗戦後復興期の昭和26年12月にはじまり、本をつんで走りに走って39年、当館編『さようなら自動車文庫』によれば、走行の距離は120万キロといいます。この戦後の時代を自動車文庫は、夢や希望、教養や娯楽、大衆社会化といわれて消費の読書、などなど様々な「読書生活」を載せて走り続けたのでしたが、私もその車に乗る機会を得て、わずかながらも、〈時代〉に同伴することができ、ほんとによかったと思っています。（岡村　敬二）